

# 昭和初期のモダニズムを

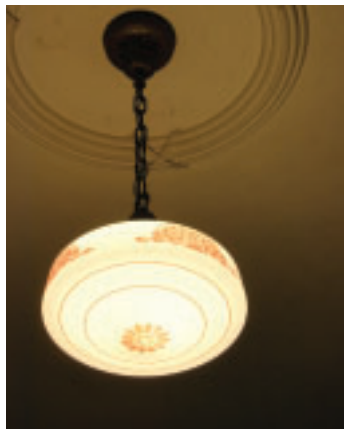
# 伝える西洋建築



(上) ゆったりとした玄関ホール。ここで、多くの客を迎えたのだろう。

(右) 2階に続く階段。真鍮の手すりはパイプの中に砂を詰めて曲げ、微妙なカーブを出したという。

(下) 優美な絵柄の入ったランプシェード。

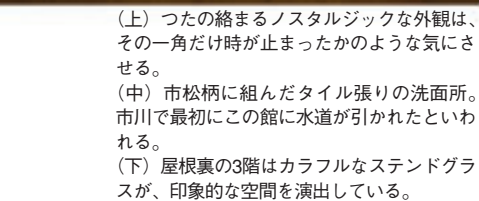


昭和の初めに、母屋に付属した  
応接室として建てられる

市川真間駅にほど近い住宅街の一角に、ツタのからまる赤い三角屋根の洋館がたたずんでいます。かつてこの界隈には、黒松の中にいくつかの洋館がありました。今ではこの「いちかわ西洋館倶楽部」だけになってしまいました。

この建物は、1927（昭和2）年、現オーナーの渡辺俊司さんの祖父・渡辺善十郎氏によって建てられました。善十郎氏は、日本橋で株の仲買人を営むかたわら、日本橋区議会議長や衆議院議員を務めた人物。関東大震災で深川の家が被災したため、市川に800坪の土地を求め、日本家屋の母屋に隣接してこの洋館を建てました。当初は、渡辺家の応接室として使われたといえます。

その後、一時渡辺家の市川別荘となりましたが、1937（昭和12）年、東久邇宮盛厚殿下が国府台の陸軍連隊に赴任されたときには、この洋館が宿舍として使われました。また、第二次世界大戦中には、



(上) つたの絡まるノスタルジックな外観は、その一角だけ時が止まったかのような気にさせる。  
(中) 市松柄に組んだタイル張りの洗面所。市川で最初にこの館に水道が引かれたといわれる。  
(下) 屋根裏の3階はカラフルなステンドグラスが、印象的な空間を演出している。



邸内に焼夷弾が落ちたものの、近所の人たちの消火活動で危うく焼失をまぬがれたというエピソードも残っています。

### 浅草の宮大工が設計した 日本人の手による洋館

建物の中に一歩入ると、そこには、大正から昭和初期にかけてのモダニズムを感じさせる優雅な空間が広がります。一枚一枚手作業で作られた吹きガラスをはめ込んだ玄関ドアや窓、使い込んでアメ色に光る木製の建具やインテリア、個性的な意匠の施された金具類…。それらには、この建物を建築した人、ここに住んだ人たちの心がまだ宿っているかのようです。

驚かされるのは、この洋館が日本人の設計・施工によるということです。建てた棟梁は浅草の「大亀」という一流の宮大工で、一説によれば彼は図面なしでこの建物を建ち上げたといえます。なお、日本人が設計・施工した当時の洋館は大変珍しく、現存するものも限られています。



## いちかわ 西洋館倶楽部

- 住所 市川市新田5-6-21
- 電話・FAX 047-322-2012
- HP <http://www.nextftp.com/itikawaseiyoukan/>
- 交通 京成線「市川真間」駅から徒歩5分  
JR総武線「市川」駅から徒歩8分

※原則としてコンサート来場者に限り、西洋館内部を公開。



ガラスは、今では珍しい吹きガラス。  
微妙なゆがみが優しい光を生む。

内部に吊り下げられた分銅の重みにより、現在でも窓は  
軽い力で開け閉めできる。



渡辺家の庭で撮られた写真  
(撮影年不詳)。洋館の左側に  
日本建築の母屋がつながって  
いたことがわかる。



この建物をつくった渡辺善十  
郎氏。兜町の大立者だった。

和の匠が西洋との融合に挑んだ  
往時の最先端スタイル。

和室から廊下を隔ててバルコニーがすぐ近くに設置されていることで、  
和洋折衷を意識させる。



洋館ながら純和室を備えた、  
和洋折衷の空間

この建物、実は、純粹な「西洋館」かと言えば、そうではありません。洋式の階段を上って2階へ行くと、なんとそこに現れるのは日本間。しかし、座敷の周りに和と洋の緩衝ゾーンとなる廊下を広くとるなど、巧みな処理で違和感なく和洋折衷を実現しています。ちなみに、和室を備えながら洋風の応接間や玄関を持つという点で、大正から昭和初期にかけて流行した「文化住宅」との共通性もうかがえます。

また、随所に施された職人のこだわりも、大きな見どころ。たとえば、上げ下げ式の木製の窓はバランサー方式となっていて、内部に吊り下げられた分銅の重みで今でも楽に窓を開閉することができます。さらに、一つひとつが異なる意匠のランプシェード、市松模様にも組まれた洗面所のタイルなど、細部にわたって美と実用性を追求した当時の職人の心意気を感じ取ることができます。

趣味を生かした音楽ホールで  
洋館を保存

「家族でこの家に住んでいた若い頃は、建物としての魅力を感じることもなく、古くて使い勝手が悪い家だと思っていたんですよ(笑)」

2階には書院造りによる10畳の和室がある。外観からは想像できない和の空間だ。



渡辺さん自慢の音楽ホール。シャンソン、クラシックなどのコンサートなどを各種開催し、好評を集めている。

そう語るオーナーの渡辺さんですが、自分が家屋を引き継ぐ年代になって改めて歴史・文化的価値を感じ、その保存を考えるようになりました。そして、1995(平成7)年、洋館に付属する音楽ホールを建設。「西洋館倶楽部」と名づけてオープンしました。

「もともと音楽が好きだったこともあり、いい音楽を多くの人に楽しんでもらうことが洋館の保存につながればと思いました。今後は、洋館をアートギャラリーやハウススタジオとして開放することも考えています」

1999(平成11)年7月、国の登録有形文化財に指定されたことを機に、テレビや雑誌などにも取り上げられ、一躍「市川の西洋館」として注目を集めるようになりました。古くから文化の香りが豊かだった市川の歴史を物語る証人とも呼べる洋館建築。ぜひとも、その変わらぬ姿を後世に残してほしいものです。